「マーリオと魔術師」（トーマス・マン）

一九二〇年代末の或夏、イタリアはムッソリーニのファシスト政府の支配下にあつたが、そのとある海邊の町に、妻と子供達を連れたドイツ人が保養の爲にやつて來た。が、折惡しく「酷烈極まる太陽の恐怖政治」とも云ふべき凄じい暑さに襲はれ辟易するが、それよりも何よりも町の異樣な雰圍氣に甚だ不愉快な思ひをする。誰もが「妙にもつたいをつけ」てゐて、外國人に向つても「わざとらしい名譽心を鼻先にぶらさげて」をり、大人は固より子供でさへも「イタリア國の偉大と尊嚴などといふ文句」を口にして、その淺薄な愛國心を僅かでも刺激しようものなら忽ち「神經過敏」に反撥する始末。

ドイツ人は滯在を切上げようかと思ふ一方、事態を直視して「何事かを學」ばうといふ氣にもなつて踏止つてゐると、チポルラといふ名の魔術師が町に公演にやつて來る。一流紙に紹

介され、その公演には「總統のご令弟來臨の榮を賜」りもしたといふ有名藝人で、公演當日の晩には町全體が出掛けて來たかの樣な盛況となり、ドイツ人も子供達にせがまれて見物に赴く。

觀客を散々待たせて舞臺に登場したチポルラは、前時代的で滑稽な道化師風の衣裳を纏つてゐたが、「氣違ひじみた顏付に目が鋭く」、「いかつい生眞面目、すべてユーモラスなものの拒否、時には不機嫌にさへなりかねぬ傲慢、それに不具者特有の、一種のいかめしさとうぬぼれの氣味」を漂はせてをり、じろじろと觀客席を睨み回し、むつつりと邊りを睥睨しながら煙草をふかし、コニャックを呷り、觀客にからみ、その質の惡いからみ方に反撥する觀客がゐても、愛國的な言辭を交へた巧みな辯舌で捻ぢ伏せて了ふ。彼の時折鳴らす「威壓的な鞭」は彼の「支配力の象徵」であり、しかも彼の手品や催眠術の卓越した技倆に壓倒されて、觀客はチポルラの意の儘となり、「自己喪失と無意志性」の木偶となり果て、遂には舞臺上で踊り出す奴もゐる。

最後にチポルラはマーリオなる青年に催眠術を掛け、青年が想ひ焦れる戀人と自分を思込ませ、口邊に接吻させる。マーリオはうつとりとなる。チポルラが鞭を鳴らす。覺醒したマーリオは愕然として、瀆された唇を兩手で抑へながら平土間に驅け下り、突如ピストルをチポルラに向けて發射する。チポルラは斃れ會場は大混亂に陷るが、それでもこれは「人をほつとさ

せる結末だつた」とドイツ人は思ふ。

一九三〇年、この作品は發表されるやイタリアでは禁書とされた。同年、ドイツではナチスが國會議員選擧で大躍進し、その三年後、マンは亡命を餘儀なくされる。町全體の「深いとげとげしく壓迫的な空氣」は公演會場により濃密に凝縮されてゐて、チポルラこそは「さういふものすべての權化のやうに思はれた」と作中にあるが、ナショナリズムの魔力が不氣味な閉鎖空間を醸成する有樣を、マンは實に巧みに描き出した。或時、チポルラは己が「支配力」の行使に反撥する觀客に向つて、「自由意志と申すものは存在せん」、「自由に振舞はうとされればされるほど、ますます吾輩の術中に陷られるばかり」だと嘯き、別の折には、「世の中には理性や德性の力に優つて强き力が存在」すると斷言する。彼は容易に否定し難い苦い眞理を語つてゐる。ナショナリズムは固より、宗教もイデオロギーも、二十一世紀の今も尙、人間の「自由意志」や「理性や德性の力」を壓殺する猛威たり得る事を止めてゐないではないか。人間の劣情を挑撥するその種の魔力との搏鬪に、西洋近代文明は自らの命運を賭してゐる。歐米との「價値觀の共有」なんぞと、日本は安直に口にすべきではない。（高橋義孝譯、新潮世界文學三十五）